

令和元年 11 月 14 日

金刀比羅宮「大嘗祭当日祭」配付資料

「^{だいじょうさい}大嘗祭・^{ゆき}悠紀・^{すき}主基と、^{さぬきふうぞくまい}讃岐風俗舞について」

だいじょうさい ゆ き す き 大嘗祭・悠紀・主基

だいじょうさい
大嘗祭とは、新たに即位された天皇が、伊勢の神宮に鎮座する皇祖・天照大神に対して、新穀からなる御飯・御酒などの神饌をお供えし、また、みずからも召し上がる一代一度の祭祀です。古代より即位儀（現・即位礼正殿の儀）が執り行われた後の、11月の2度目の卯日を祭日としてきました。

令和の大嘗祭は11月14日の夜半から翌未明に執り行われる予定です。

大嘗祭は、天皇がその御代の最初に行う大規模な新嘗祭とされていて、今年は例年の新嘗祭（11月23日）は斎行されないことになっています。大嘗祭は7世紀末の天武天皇・持統天皇の時代に成立したとされ、平安時代に基本的な形式が確立して以降、古代・中世に亙り大幅な変更なく執り行われました。文正元年（1466）の後土御門天皇の大嘗祭以降、戦乱により約220年中断されましたが、江戸時代中期に再興されました。元文3年（1738）の櫻町天皇の大嘗祭からは、前回の平成2年まで11代、途切れることなく斎行されています。

大嘗祭の中核は、天皇が神饌をお供えする神事ですが、その準備は数カ月前から行われました。その始まりが、新穀を収穫する二つの地方を占いで決定する儀式（斎田点定の儀）です。両地方は「悠紀地方（国）」「主基地方（国）」と呼ばれ（令和の大嘗祭は、それぞれ栃木県と京都府）、「悠紀」とは「清浄」、「主基」とは「次（もう一方の清浄）」の意味とされています。

大嘗祭のためだけに臨時に造営される祭場を「大嘗宮」といいますが、その正殿である「悠紀殿」と「主基殿」では、それぞれ悠紀地方と主基地方で収穫した新穀を、天皇が一晩に二度に亙って神饌としてお供えされます。大嘗祭では、神饌の品々や新造の祭場である大嘗宮の他に、三河国（現・愛知県）の絹織物（繪服）や阿波国（現・徳島県）の麻織物（匳服）も供えられてきました。つまり大嘗祭は天照大神を古式ゆかしい「衣食住」をもって、丁重に饗応する祭祀であるといえます。

さぬきふうぞくまい 讃岐風俗舞

本日の大嘗祭当日祭で奏進した舞曲は「讃岐風俗舞」と申し、讃岐稲春歌1曲・讃岐風俗歌1曲・讃岐風俗舞4曲の計6曲から成っており、「讃岐風俗舞 一具」とも呼ばれます。この楽曲は、大正時代、讃岐国が主基国（主基田）に勅定された折、大嘗祭における、大嘗宮主基田の儀式に奏される為、宮内庁により、主基稲春歌、主基風俗歌、主基風俗舞として、作詞作曲のうえ、舞の手ぶりが作られたものです。

大嘗祭には、「悠紀」・「主基」それぞれの地方の風景や風俗を表した新作舞曲が祭典の中で奏せられることが通例となっており、歌詞となる和歌は選ばれた歌人が作り、その地方の風景や地名などを詠み込みます。作曲と作舞は宮内庁楽部が担当し、作られた和歌に、楽師がそれぞれの地域の民謡や古くから伝えられてきた郷土舞などを取り入れて、曲と舞をつけていきます。

本来これらの楽曲は、天皇陛下御即位にあたり、一代に一度限り奏進されるもので、ほとんど後世に残らない楽曲ですが、金刀比羅宮ではこの記念の歌舞をこのまま失くしてしまうのは惜しいと考え、長く後世に伝えるために職員を派遣し、宮内省楽師に教えを受け、楽曲を持ち帰り、現在まで伝わっております。その際、主基稲春歌は讃岐稲春歌に、主基風俗歌は讃岐風俗歌に、主基風俗舞は讃岐風俗舞に改められました。

「讃岐風俗舞 一具」の歌詞

当宮の「讃岐風俗舞 一具」の作詞は、大正4年、東宮侍従長子爵入江為守作の和歌であり、それぞれの楽曲内に、讃岐の風土を表した地名が含まれています。

讃岐稲春歌

たまも さぬき やまだ あら よ あき た ほ いね つ
玉藻よし 讃岐の山田 新た代の 秋の足り穂の 稲や春くらむ

(意味) 讃岐の山田村では、御代始めのこの豊かな年に際し、よく実った稲を春いているのであろう。

讃岐風俗歌

くもみまで たか ひび さとびと つづみがおか ちよよ こゑ
雲井迄 高く響かむ 里人の 鼓岡に 千代呼ばふ声

(意味) 鼓が岡で、里人の「この御代が千代萬代に、いついつまでも栄行かん事を祝う声」は、雲のある天つ空にまでも高く響くであろう。

讃岐風俗舞

参進曲

おほぎみ みよし めす とき かぜ あづきしま ふ わた
大君の 御代知ろし召す 時つ風 小豆島にも 吹き渡るらむ

(意味) 我大君の御代を治め給うにあたり、天も穏にして、時津風（良いタイミングで吹く追い風）が遍く吹き渡るが、その風は小豆島にも吹き渡るであろう。

舞曲

よろこ くも み むらさき いろ にほ あき はぎはら
慶びの 雲と見えけり 紫の 色に匂へる 秋の萩原

(意味) 秋の萩原には一面に萩の花が紫色に咲き匂うて、ちょうど、御代を祝する瑞雲のように見える。

舞曲

ふ かぜ えだ な おほみよ いやさか まつやま さと
吹く風も 枝を鳴らさぬ 大御代に 弥栄ゆらむ 松山の郷

(意味) 天穏やかに、吹く風も枝を鳴らすに至らぬ、この太平の御代において、松山の郷は、いよいよ栄えるであろう。

退出曲

よろづよ かげさや て つき かがみ みが たま うらなみ
萬代の 影亮かにも 照る月の 鏡を磨く 玉の浦波

(意味) 君が大御代のごとくいついつまでもさやかに照らすべき月は、ちょうど鏡のように澄んでいるが、それをなおも磨くように、玉之浦の波が寄せては返している。

※ 赤字は、讃岐の風土を表した地名。



御田植祭での讃岐風俗舞